

改善困難な むせこみ患者への嚥下体操の試み —効果を共有する場の大切さ—



医療法人社団 五稜会病院
日精協精神科病院医学会
平成22年11月

○後藤小百里・泊り由紀子・浮田志保・鈴木由美子・八木こずえ・中島公博

はじめに

- 患者の高齢化に伴う嚥下能力の低下により、誤嚥や窒息などの事故リスクが高まっていた
- 日々の観察や見守り、声かけだけではむせこみ改善困難な状況が続くため、グループで嚥下体操の実施を試みた
- 開始後、患者の不満が高まり継続困難が生じたが、患者とともにプログラムの見直しの機会を持った結果、看護師との関係性の変化や患者の自発性が引き出され、継続の効果を得られた
- この経過で得られたことを報告したい

開始にあたってのアセスメント

- 現状の観察や声かけだけでは老化による機能低下は加速しリスク管理面、患者らの食のニードを守るために対策を考える必要がある。
- 嚥下機能低下のある患者は入床傾向で、作業療法にも参加困難な状態。
- 嚥下訓練は即効性はなく毎日の訓練が必要なため、飽きずに負担にならないような工夫が必要。

三叉神経刺激
身体が摂食への環境を整えられる

継続することで
喉頭挙上筋が強化
口腔機能の向上

グループを作って体操をしてみよう!

食前に行う
体幹、頸部、口腔周囲筋群のリラクゼーション

共に行う場
心の通い合い
お互いの心による変化

開始までのプロセスと実際




A氏	B氏	C氏	D氏
統合失調症 60代 女性	統合失調症 60代 女性	感情障害 70代 女性	統合失調症 70代 女性
・かきこみ ・早食べ ・むせ込み ・嘔吐 ・食直後のおやつ要求、摂取が目立った	・むせ込み時々 ・食べこぼし	・配膳まで待てない ・かき込み ・早食べ ・食行動激しい ・むせ込み多い	・むせ込み時々

嚥下体操の実践

- グループによる嚥下体操を実施
- 平日の昼食前10～15分程度の上肢・嚥下体操(詳細別紙参照)
- 期間: 2010年3月～10月
3ヶ月1クールとする


工夫した点

- ・覚えやすく簡単、短時間で毎日同じことを行った(指導者にとっても)
- ・開始前に一人一人に「一緒にやりますよ」と声掛け誘導を行った
- ・モチベーションを上げるためアロマ芳香、音楽を流した環境で行った
- ・一人一人をその場で褒めながら行った




写真は本人の承諾をとっています。

お誘い時と開始当初は・・・



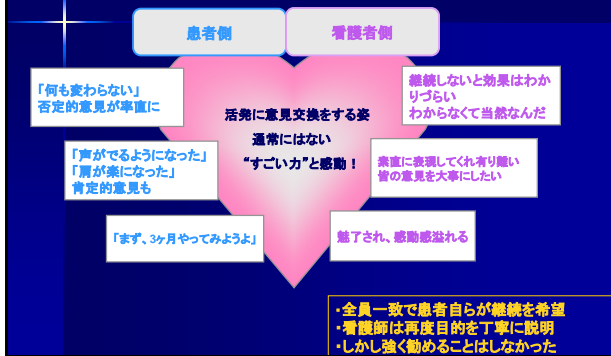
「嫌です。」
・・・でも、誘うと一緒に行動

ところが2ヵ月後.. 不満と疑問の声..

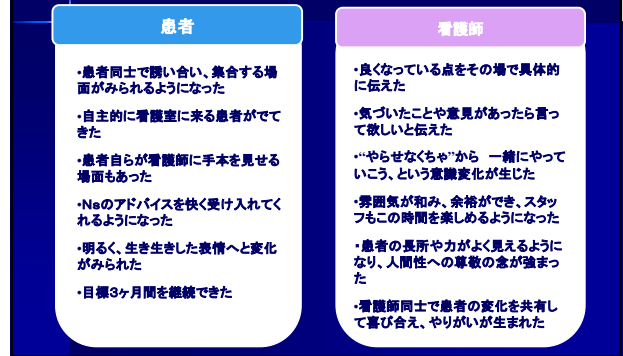


そこで.....話し合いをしてみると...

見えてきた患者の力

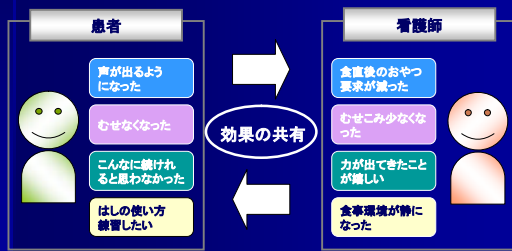


話し合い後の変化



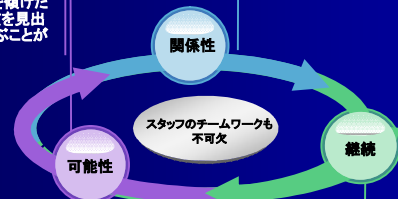
結果

- ・ほぼ全員が毎日参加し、目標3ヶ月達成！！表彰式行う
- ・開始後窒息、誤嚥等の事故が発生していない 現在も継続中である
- ・かき込み、早食べ、むせ込みが減り、食事中に注意を呼びかける必要性が減少
- ・3ヶ月達成時に振り返り感想を述べてもらった



考察

① 立ち止まって患者の率直な思いに耳を傾けた時、ケアの本質を見出し、そこから学ぶことができた



② 率直に効果を検討しあうことが、患者、看護師双方にあった殻を破り、一緒に人間的なふれあいを楽しむ関係性が生まれた

③ 患者が率直な思いを受け入れてもらえたと感じた瞬間から安心感が宿り、意欲が喚起され、効果を感じるまで継続することができた

まとめ

・効果を共有するプロセスを大事にしたことで関係性が強まり、プログラムの効果を共有できるまで継続でき、安全管理にも繋がった

・尊重し合い、諦めずに“ありのまま”を受け止め合った時に力が引き出され、自然と健康面を引き出すことができた



今後の療養環境にも良い影響となる
これからも患者のエンパワメントにつながるケアの工夫を展開していきたい